弥生末から古墳時代前期(3 世紀～4世紀) 邪馬台国から日本の国家形成の時代

「鉄」で栄えた近江の中心都市集落「彦根市稲部遺跡」訪問記　2016.10.22

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点

近江の彦根から纒向遺跡に匹敵する大型建造物のある鉄器物流を担う拠点都市集落が出土

大型建物跡

交通要衝「イナベ国」か

東海や山陰の土器も出土

国内最大級の大型建物跡と交易で栄えた「イナベ国」の存在が浮かぶ。滋賀県彦根市の稲部遺跡。今回の調査からは交通の要衝という近江の立地を生かし、鉄なるJR米原駅から約15キロ南西の地点。船が使える琵琶湖も約4キロの距離だ。遺跡からは東海や山陰の土器も出土しており各地との交易を推定させる。

鍛冶工房が最盛期を迎えたのは、弥生時代末―古墳時代初頭。邪馬台国や、敵対する狗奴国が成立しつつあった後国の形成期で、武器や道具の素材が石から鉄へと変わり、鉄の入手が勢力を左右した時代。当時、鉄素材は朝鮮半島から輸入したとされ、越前(福井県)の土器も出土していることから、イナベが独自に日本海ルートで入手していた可能性があるという。

大阪大の福永伸哉教授(考古学)は邪馬台国が奈良、狗奴国は東海地方にあったと推定した上で「中間に位置するイナベは双方を見ながらキャスティングボートを握ろうと鉄目当てに線を歩んだのかもしれない」と推測。発掘した結果、大型建物が出現したので「は」とみている。

古墳時代前期の大型建物跡(白線)や、その後建て替えられた跡を確認(黒線)が見つかった滋賀県彦根市の稲部遺跡=14日(彦根市教育委員会提供)

強力な豪族の存在示す

定森秀夫滋賀県立大教授(考古学)の話　稲部遺跡は弥生時代から古墳時代中期にかけて継続した遺跡で、古墳時代前期前半の豪族居館の成立過程が分かり、重要だ。弥生時代末から古墳時代初頭の鍛冶工房で使った鉄素材は朝鮮半島から輸入しており、それを入手できる強力な豪族の存在を示している。地理的に、大和の政権中枢から入手したのではなく、日本海ルートで独自に入手していた可能性があり、さらにその製品を東国へ供給していた可能性も考えられる。

鍛冶炉の発見が不可欠

村上恭通・愛媛大東アジア古代鉄文化研究センター長の話　鉄素材の加工に必要なハンマーや台石が出土しているものの、鍛冶工房と断定するには、炉の発見が不可欠だ。遺跡内のどこかに炉がある可能性があるので、今後の調査に期待したい。見つかった約6キロの鉄片についても、付着した土を取り除き、実際の総量や形の把握などの精査が必要だ。

2016.10.18.神戸新聞朝刊

滋賀県彦根市の稲部遺跡で、古墳時代前期(3世紀中ごろ)の大型建物跡(面積188平方㍍)が見つかり、17日、市教育委員会が発表した。弥生時代末―古墳時代前期では、邪馬台国の有力候補地とされる纒向遺跡(奈良県桜井市)の大型建物跡(238平方㍍)に次ぐ規模だった。また当時では国内最大規模の鍛冶工房とみられる遺構も見つかった。(30面に関連記事)

遺跡は東日本と西日本をつなぐ交通の要衝に位置。邪馬台国の頃にあった30国の一つとする見方もあり、邪馬台国から大和政権成立期に鉄と交易で栄えた一大勢力があったとと

邪馬台国時代の大型建物跡

滋賀の遺跡、国内最大級

を示す遺跡として注目

建物跡は縦16・2㍍、横11・6㍍。柱穴の大きさは1・5㍍と巨大で、柱の直径は0・3～0・4㍍。そばには柵とみられる柱穴などがあり、豪族居館だった可能性がある。同じ場所で、柱が多い総柱建物(145

古墳時代前期の大型建物跡が見つかった滋賀県彦根市の稲部遺跡

鉄、交易で栄えた国存在か

平方㍍)に建て替えられており、総柱建物は物流に関わる巨大倉庫とみられている。

弥生末―古墳前期の竪穴建物23棟からは鉄片など約6キロ分が出土。集落からの出土としては全国的にも屈指の量という。ハンマーとして使った石や、鉄の矢尻も出土したことから、市教委は、鉄器生産を専業とする工房で、鉄製武器などを作っていたとみており、「地域の鉄器生産センターではないか」と話している。

現地説明会は22日午後1時半～3時。

遺跡からは福井、岐阜、静岡、奈良、鳥取など各地の土器も出土、3世紀の物流の中心的な遺跡とみられるという。

稲部遺跡は、大規模集落の伊勢遺跡(滋賀県守山市)と入れ替わるように登場。弥生後期から古墳中期まで約400年にわたり存続し、建物の配置などから6時期に分けることができるという。

市教委は「大和政権との結び付きによって大型建物が出現したと考えられ、倭国形成期の変遷を捉えることができる遺跡だ」と評価している。

2016.10.22.　現地説明会

ポットが置かれている遺跡が大型建物跡で、鍛冶工房跡も含め、数多くの建物跡が重なりあって出土
琵琶湖の時代　交通の要衝近江で栄えた鉄の物流拠点都市　彦根市伊部遺跡　2016.10.22.現地説明会

「邪馬台国時代の近江の大都市集落出土」と大きく新聞報道された彦根市「稲部遺跡」　2016.10.18.

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点

近江の彦根から 纒向遺跡に匹敵する大型建造物のある鉄器物流を担う拠点都市集落が出土

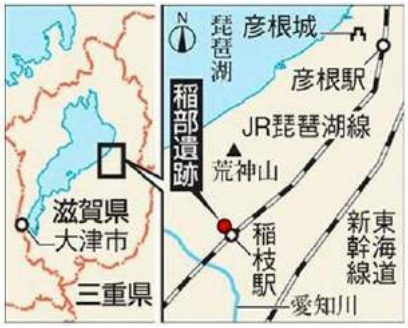
邪馬台国の時代　鉄で栄えた近江の大都市集落稲部遺跡」訪問記

1.【遺跡概要解説】邪馬台国の時代　鉄で栄えた大都市集落　滋賀県彦根市「稲部遺跡」
2.　平成 28 度稲部遺跡　現地説明会資料　　2016.10.22.　彦根市教育委員会
3.　稲部遺跡　　第６次・第７次発掘調査現地説明会
　3.1.　第６次調査域　稲部遺跡の中心部【1】祭祀の区画・大型建物　ほか
　3.2.　第７次調査域　稲部遺跡の中心部【2】　方形区画と大型建物と鍛冶工房群
　3.3. 発掘調査域から出土した遺物　　日本各地の土器片　＆　鍛冶関連遺物
　3.4. 今回の6次・7次　調査まとめ　?現説資料まとめの整理転記>
　参考 1.　荒神山と荒神山古墳と稲部遺跡
　参考2　稲部遺跡に先立つ大型建物や巨大祭祀空間のある 巨大集落遺跡「伊勢遺跡」
　参考 3. 淡路島五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産
　　淡路市教育委員会　伊藤宏幸氏講演 より
4. まとめ　稲部遺跡 発掘調査　平成２８年現地説明会に参加して　by Mutsu Nakanishi

卑弥呼の時代にヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に「大和の纒向遺跡に匹敵する大型建物を持つ鉄の物流拠点とみ られる 都市集落(彦根市稲部遺跡)」が出土。 10 月 22 日現地説明会が開かれた。

巨大都市集落の中核の大型建物のすぐそばに、幾棟もの鍛冶工 房群(竪穴住居群)が、繰り返し継続して存在。

「日本の国造りの key は鉄」と言われながら、それを実感できなかったが、都市の中心部にこんなに鍛冶工房が林立する姿を見るの は初めてです。



鉄器物流を担う近江の拠点集落集落　まさに「鉄が主役」。 初期ヤマト王権に組み込まれた後も、畿内と東国・北陸を結ぶ拠点 として、更に勢力を伸ばしていった近江の大勢力の拠点とみられる。卑弥呼の日本の国造りの時代に、ヤマトと結び、鉄の流通拠点を握 った近江の巨大都市集落。　鉄が主役の都市。 日本の国造りにどんな役割を演じていたのか? この巨大都市の中核でどんな鉄器生産が行われていたのか? まだ、調査は始まったばかり。今後の検討がうれしい遺跡です。

第七次調査域と並立した六次調査区　稲部遺跡の中心部【Ⅰ】

すでに埋め戻されている南そして大溝の北の竪穴住居群に取り囲まれて、倉庫・儀礼施設と考えられる大型建物遺構が出土

方形区画内大型建物とともに鍛冶工房群が出土した第七次調査区　稲部遺跡の中心部Ⅱ

纒向遺跡の超大型建物に匹敵する超大型建物が出土　鉄交易の拠点都市集落の居館城とも考えられる

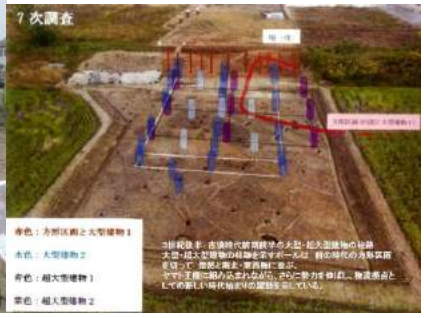
稲部遺跡　今回現地説明会が開かれた調査区域(第6次･第7次)　　2016.10.22.

【遺跡概要解説】

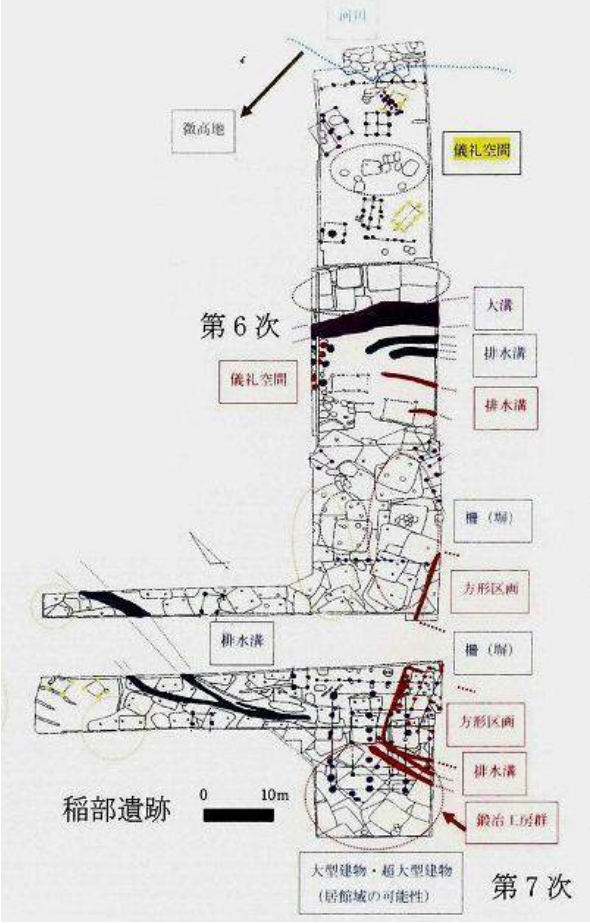
１．邪馬台国の時代　鉄で栄えた大都市集落　滋賀県彦根市「稲部遺跡」

弥生時代終末から古墳時代初め（３世紀前半）の鉄器工房群の遺構出土
交通の要衝「いなべ国」　「日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」

2016.10.18.　毎日新聞記事より



滋賀県彦根市教委は１７日、市内の「稲部遺跡」（同市稲部、彦富両町）で 弥生時代終末から古墳時代初め（３世紀前半）の鉄器工房群の遺構が見つか ったと発表した。
同時代では他にない規模という。大規模な建物の跡も確認された。
当時、鉄製品の原料は大陸からの調達に頼っており、同時代の邪馬台国につ いて記した中国の史書「魏志倭人伝」で、大陸と交易があったとされる「三 十国」のうちの一つともみられるという。
鉄器工房は３０棟以上ある竪穴建物群で、各棟は一辺３．５～５．３メートルの方形。うち２３棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかった。 一部に土なども含んだ状態だが、全体の重さは計約６キロに上るという。
同時に鍛冶や鉄を加工する際に使ったと思われる台石や、鉄製矢尻２個なども 見つかった。
国内には当時、製鉄技術がなく、鉄の延べ板を朝鮮半島から取り寄せ、武器や農具、工具を造っていたと考えられる。
一方、鉄器製造が始まった直後に大型の建物が現れた他、鉄器製造が終了した３世紀後半には、一辺十数メートル規模の大型の建物２棟が相次ぎ出現。首長の居館や巨大な倉庫として利用され、他の国との物流拠点だった可能性が あるとしている。



今回の発掘調査域概要　（現説資料より）

邪馬台国畿内説の有力候補地とされる纒向（まきむく）遺跡（奈良県桜井市）では、より大規模な同時代の建物跡が確認されている。　「魏志倭人伝」では、倭人は現在の韓国・ソウル辺りにあった帯方郡の東南の
大海の中にいて、もとは「百余国」あったが、同書が書かれた３世紀には「使訳（使者や言葉）通ずる所三十国」と伝えている。
福永伸哉・大阪大教授（日本考古学）は「稲部遺跡は東西日本の結節点にあり、近江勢力の大きさを物語ると共に日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」と 話す。

大型建物イメージ図　（現説資料より）

Copyright 毎日新聞

2.平成２８年度　稲部遺跡　現地説明会資料　2016.10.22. 彦根市教育委員会

一部資料を整理していますが、全文は下記インターネット内にあります
彦根市　http://www.city.hikone.shiga.jp/0000009271.html

1　はじめに

彦根市教育委員会では、彦根市稲部町・彦富町において稲部遺跡の発掘調査を実施しました。この調査は、市道芹橋彦富線道路改良工事に関わる調査で、稲部遺跡としては 6 回目と 7 回目の調査となります　第 6 次調査区は、独立棟持柱建物、井戸、金属器工房からなる儀礼空間の南側に位置し、第 7 次調査区は、密集する竪穴建物群と方形区画が確認された第 3 次調査区の南側に位置します。調査期間は、第 6 次が平成 27 年 6 月～平成 28 年 3 月、第 7 次が平成 27 年 11 月から開始し、現在調査中です。調査面積は、第 6 次が 1042.33 ㎡、第 7 次が 430.37 ㎡です。

2　調査地の位置と環境

調査地は標高約 90.00m 前後の旧愛知川の微高地上にあたります。微高地の北には旧愛知川である文禄川が、やや南には同様に旧愛知川である来迎川が流れています。周辺では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が密集して分布しています。

稲部遺跡と稲部西遺跡を含む稲部遺跡群は、昭和 56 年（1981）の宅地造成工事に伴ってはじめて調査されました。その後、平成 25 年（2013）から開始された市道改良工事に関わる調査において独立棟持柱建物、大型建物、方形区画、金属器工房などが発見され、現在までに 180 棟を超える竪穴建物が検出されていますが、第 6 次調査で大型建物 3 棟が、第 7 次調査で大型建物 2 棟、超大型建物 2 棟、大規模な鍛冶工房群が確認されたことにより、稲部遺跡群の全体的な遺構の変遷が明らかとなりました。また、稲部遺跡群調査指導検討会（平成 28 年 9 月 7 日開催）における調査成果の審議を経て、稲部遺跡群が、弥生時代から古墳時代にかけての日本の国家形成期を考える上で極めて重要な遺跡であると評価されています。

3　調査の概要

(1) 第 6 次調査

大型建物 3 棟を含む掘立柱建物 6 棟以上、竪穴建物 20 棟以上、排水溝 4 条、大溝 1 条などを検出しました。

倉庫・儀礼施設とみられる大型建物 3 棟（23.80 ㎡以上、30.70 ㎡以上、推定 50.60 ㎡の独立棟持柱建物）が弥生時代終末から古墳時代前期（3 世紀中葉から後葉）にかけて連続して同じ場所に建てられる集落の中心的な儀礼空間です。儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とほぼ同じ時期です。

大溝からは土師器とともに韓式系土器も出土しています。

(2) 第 7 次調査

鍛冶工房の可能性が高い竪穴建物 23 棟以上を含む竪穴建物 30 棟以上、排水溝 2 条、方形区画の一部である溝、塀の可能性がある柵列を検出しました。

弥生時代終末から古墳時代初頭（3 世紀中葉）には、倉庫・儀礼施設や居館の可能性がある方形区画とその内側の大型建物 1（独立棟持柱建物・43 ㎡）が出現し、方形区画の南側では大規模な鍛冶工房群で鉄器（鉄製武器や農工具）生産が行われています。

その後、古墳時代前期前半から後半（3 世紀中葉から 4 世紀）にかけて、方形区画を切ってさらに新しい大型建物 2（63 ㎡）・超大型建物 1（188 ㎡）・超大型建物 2（145 ㎡）が柵（塀の可能性がある。）を伴って出現します。特に、超大型建物 1 は、纒向（まきむく）遺跡（奈良県桜井市）第 166 次調査の超大型建物（238.08 ㎡）に次ぐ日本列島屈指の規模です。大型建物 2・超大型建物 1 は、居館域の一部を構成する建物であり、超大型建物 2 は、王権の関与する巨大な倉庫である可能性が考えられます。

4　まとめ

○北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある3世紀の近畿北部の中心的な遺跡です。これは、大和（奈良県）、伯耆（ほうき）（鳥取県）、越前（福井県）、湖南地域（滋賀県南部）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）、伊勢（三重県）、東遠江から駿河（静岡県東部）の各地域の土器の出土からも各地からの交渉があり、交流の要、物流の中心地となっていることが裏付けられます。朝鮮半島の渡来人との関係を示す韓式系土器も出土しています。

○直径数百m、面積約200,000㎡、弥生時代後期中葉（2世紀）から古墳時代中期（5世紀）にかけて継続する巨大な集落です。

○青銅器の鋳造、朝鮮半島から運ばれた鉄素材をもとに鉄器の大規模な生産を行っており、大型建物・超大型建物や独立棟持柱建物という首長層が居住したり、儀礼に使用したと考えられる建物と区画が時代を経るごとに出現し、王権との関わりによって政治色を強めていく過程を示しています。

○祭祀都市・政治都市としての面を強く持ち、工業都市としての面もあわせ持つ近江の巨大勢力・クニの中枢部であり、3世紀の国内屈指の遺跡です。

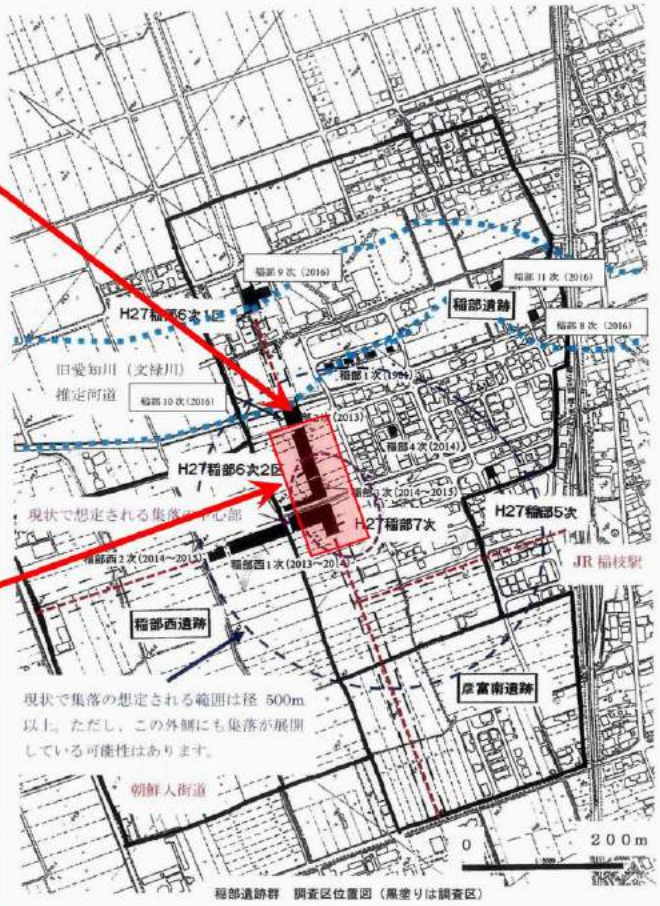
○3世紀前半を中心とするヤマト政権が成立しつつある時代、日本の歴史上でも非常に重要な時期の大集落です。日本列島における倭国の成り立ちを考える上で、今までにない極めて重要な遺跡です。

○3世紀の時代にとどまらず、4世紀から5世紀には、巨大倉庫の出現によって物流拠点として発展・継続し、韓式系土器（三国時代・3～7 世紀の朝鮮半島南部地域から渡来人が持ち運んだり、すでに日本に住んでいた人々が朝鮮半島の土器をまねて作った土器）の出土から、朝鮮半島と交流し、当時の最先端技術を渡来人から導入していた可能性があります。

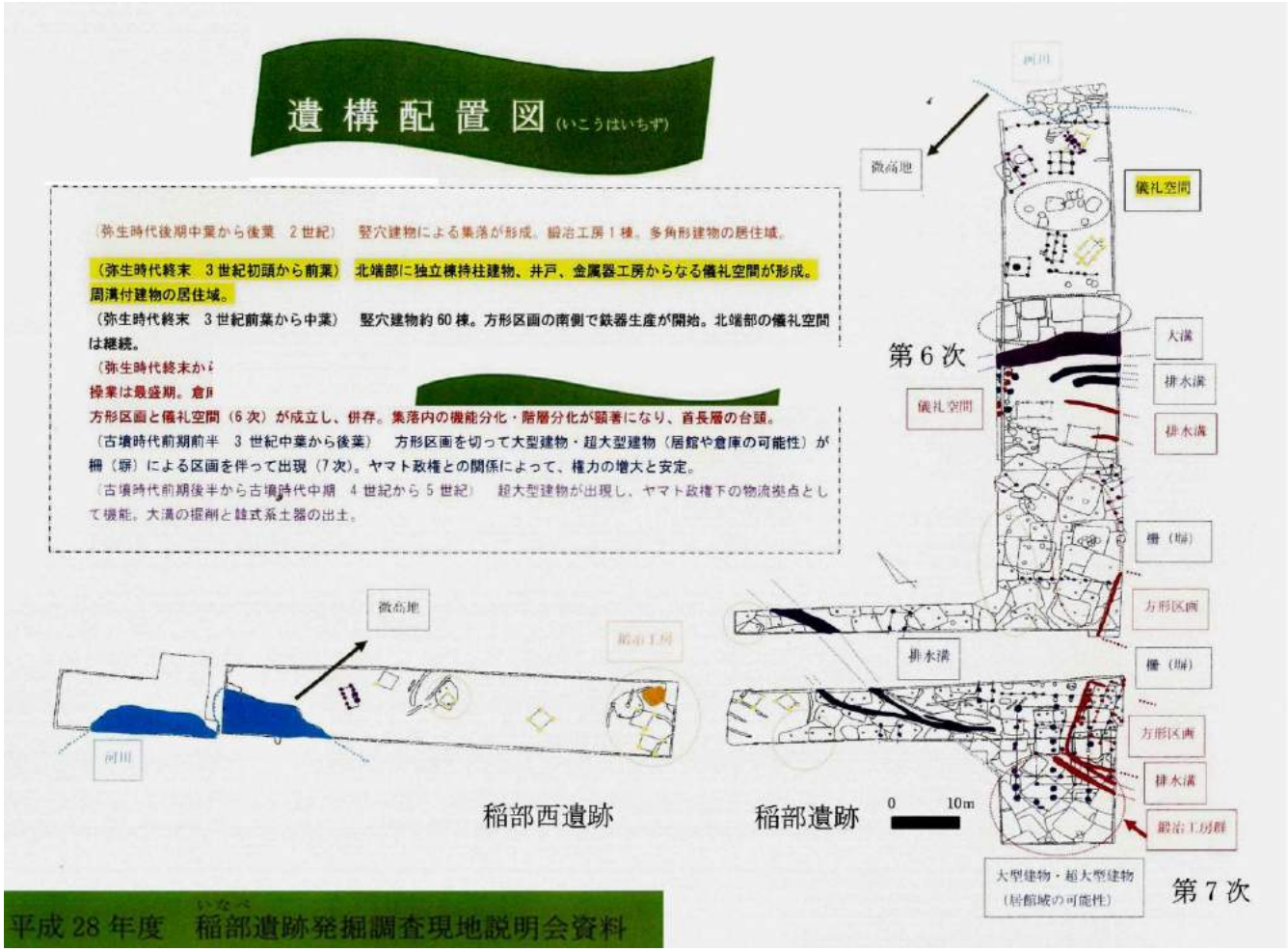
○ヤマト政権との関係を前提として、荒神山古墳の築造に関わる巨大勢力の本拠地である可能性を含め、荒神山古墳との深いつながりをもつ遺跡です。

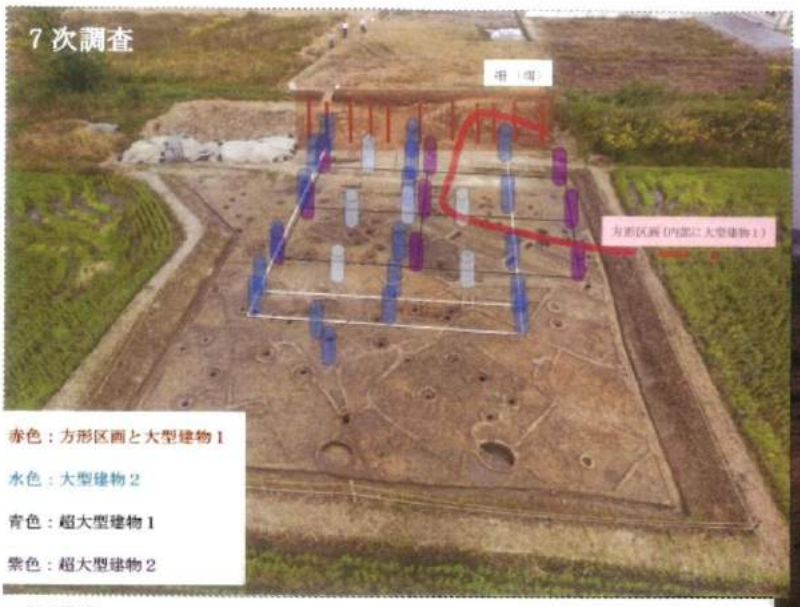
○稲部遺跡では、縄文時代後期（今から4,500年前）から中世（今から500年ほど前）までの遺構と遺物が見つかっています。中でも、弥生時代後期中葉（紀元2世紀）から、古墳時代前期（4世紀）にかけての非常におおきな集落がみつかりました。これは、「ムラ」というよりも、むしろ「クニ」の中枢部のような集落で、非常に学術的価値の高いものです。教科書にも載っている「魏志倭人伝」（中国の歴史書）が伝える「邪馬台国」とほぼ同じ時代の遺跡です。「魏志倭人伝」に書かれる「倭（日本のこと）」には、「邪馬台国」という大きな国があり、「卑弥呼」という女王がいた、と書かれていることがよく知られますが、その続きには日本の中に邪馬台国の他に魏と外交関係をもつ三十か国がある、とあります。その三十か国のうちの一つが、稲部遺跡である可能性が出てきました。ただし、まだ遺跡全体の2割程度しか明らかになっておらず、周辺にはさらに重要な遺構が存在している可能性が高いものと考えられます。大型建物や超大型建物の上部構造、方形区画内の遺構の解明、鍛冶工房群の実態とその広がり、集落の構造などについてもさらに検討していく必要があります。荒神山古墳の築造背景や被葬者との関係についても大きな課題です。

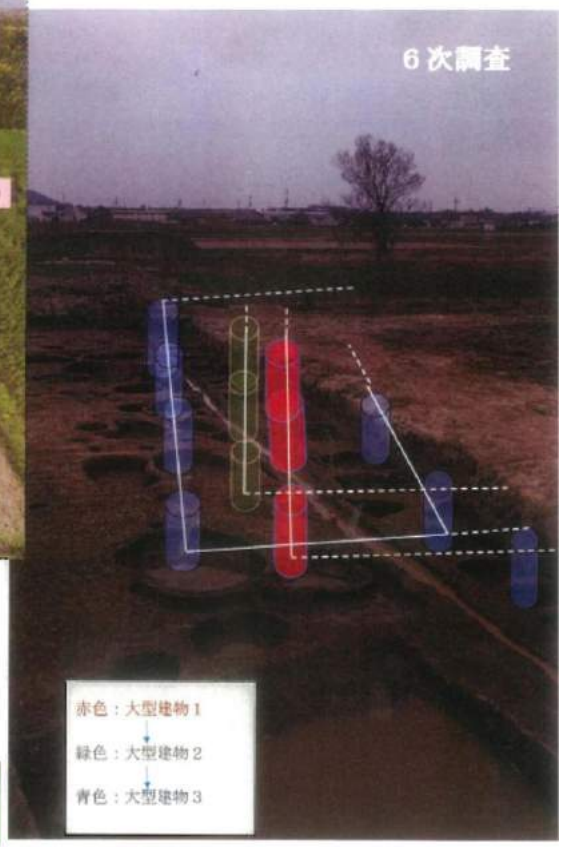
発掘調査にあたりましては、関係機関、地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。非常に重要な遺跡の保護のため、更に周辺の調査を推進し、稲部遺跡群の構造や遺構の性格を明らかにしていきたいと考えております。



〈左側　写真部を追加し、ここにあった語句説明を省略〉







【7次調査】
方形区画・大型建物1（弥生終末～古墳初頭・3世紀）
43㎡　棟持柱建物
大型建物2（古墳前期前半・3世紀中葉～後葉）63㎡
超大型建物1（古墳前期前半・3世紀中葉～後葉）
188㎡　稲部遺跡で最大規模の建物
超大型建物2（古墳前期前半以降・4～5世紀）145㎡

【6次調査】
大型建物1（弥生終末～古墳初頭・3世紀）23.80㎡以上
大型建物2（弥生終末～古墳初頭・3世紀）30.70㎡以上
大型建物3（古墳前期前半・3世紀中葉～後葉）
推定50.60㎡　棟持柱建物

大型建物と超大型建物

3世紀前半の東アジア
（大阪府立弥生文化博物館 1999『卑弥呼誕生』）改変

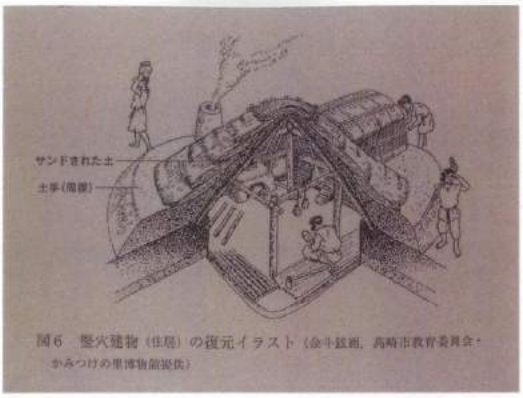


図6　竪穴建物（住居）の復元イラスト（金斗鉉画，高崎市教育委員会・かみつけの里博物館提供）

竪穴建物の復元図（若狭徹 2015『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館）

サラワク族の鍛冶作業風景
（村上恭通 1999『倭人と鉄の考古学』青木書店）

1920年代のジャワ・スマトラ島に住むサラワク族の鍛冶作業風景です。

屋外で作業しており、ビストン輪を吹く一人（左）がいて、その隣で三人（右）が炉の傍で鍛打の作業を行っています。二人は蔓で固定した石鎚をふるい、金床石も蔓で固定され、緩衝材として木材の上に置かれています。鍛冶炉はほとんど掘りこまれていません。長い棒状の素材の先を加工したピンセット状の道具で挟んでいます。

弥生時代の石器主体の鍛冶具のあり方や鍛冶技術を考える上でとても参考になる民族誌です。工房の様子や作業空間など、当時の鍛冶技術はまだまだ分からないことが多く、民族誌を参考にした発掘調査成果の比較検討が期待されます。

下長遺跡（滋賀県守山市）　独立棟持柱建物の復元（滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの』）

下鈎遺跡（滋賀県栗東市）　独立棟持柱建物の復元（滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの』）

表 東アジア史年表と稲部遺跡群の動向

西暦	時代	日本（倭）のできごと	稲部遺跡群ほかのできごと	王朝	主な皇帝	中国・朝鮮半島のできごと
100 150	弥生時代 後期	107 倭国王帥升らが後漢に朝貢する。 このころ倭国乱。 このころ卑弥呼が共立される。	竪穴建物による集落が形成され、西側では多角形の竪穴建物が展開する。 （伊勢遺跡で巨大なマツリ場が成立する。） 小規模な鉄器生産が開始される。	後漢	和帝 安帝 順帝 桓帝 霊帝	184 黄巾の乱。 190 遼東太守公孫度が自立を強める。
200 250	弥生時代 終末期 庄内式期	239 卑弥呼が難升米らを魏に派遣する。 240 帯方郡からの使者が倭国に派遣される。 243 卑弥呼、使いを送る。邪馬台国と狗奴国との戦い。 247 卑弥呼、使いを送る。 248 このころ卑弥呼が亡くなる。再び戦乱が起こる。 壹与が女王となる。 266 壹与が西晋に朝貢する。	竪穴建物による集落が継続し、集落の西側で周溝付建物が出現する。（大和東南部で纒向遺跡が出現する。） 北端では独立棟持柱建物（儀礼施設）と金属器工房（鉄器生産と青銅器鋳造）が出現する。 竪穴建物が急激に増え、掘立柱建物も増える。北端では独立棟持柱建物によるマツリ場が柵によって区画さ南側の竪穴建物群の一画で大規模な鉄器生産が行われる多数の竪穴建物群による集落が継続し、南側では方形区画（居館や儀礼施設の可能性）と独立棟持柱建物が出現する。方形区画南側の大規模な鉄器生産は最盛期を迎える。	三国（魏・呉・蜀）	献帝 文帝 明帝（魏）	208 曹操と劉備・孫権との赤壁の戦い 220 曹丕が皇帝となり、魏を興す。 221 劉備が皇帝となり、蜀を興す。 222 孫権が自立して、呉を興す。 234 魏と蜀の五丈原の戦い。 236 遼東の公孫淵が燕を興す。 238 魏が公孫氏を滅ぼす。 263 蜀が滅びる。
300 350 400	古墳時代 前期 布留式期	367 百済の使者が倭国に派遣される。	溝による方形区画のあった場所で、新たに柵による区画を伴う超大型建物（居館の可能性）が出現するとともに、北側では大型の独立棟持柱建物（儀礼施設）が建 その後、巨大な倉庫が建てられる。 掘立柱建物による集落が継続し、大溝が掘削される。朝鮮半島系の土器（百済の陶質土器など）がもたらされる。	西晋	武帝 孝恵帝	265 司馬炎が西晋を興す。 280 西晋が呉を滅ぼし、中国統一する。 301 八王の乱が始まる。華北混乱。 313 高句麗が楽浪郡を滅ぼす。
450 500	古墳時代 中期	413 倭王讃が東晋へ使いを送る。 425 倭王讃が宋へ使いを送る。 438 倭王珍が宋へ使いを送る。 443 倭王済が宋へ使いを送る。 478 倭王武が宋へ使いを送る。	荒神山古墳（大型前方後円墳）が築造される。	東晋 宋 斉 梁		404 高句麗が倭と戦う。

鉄と交易の時代に栄えた稲部遺跡

稲部遺跡の時代は「卑弥呼の時代」「纒向遺跡の時代」と重なります。

伊勢遺跡（守山市の大遺跡）が終焉を迎え、銅鐸祭祀もなくなっていく時期です。

この時代、こんなに大きな建物のある遺跡は珍しい！クニの中枢部で、地域の有力者がいたことは間違いありません。

倉庫の中には何が？物流センターだったんだね！

稲部遺跡はずいぶん長い間続いた集落だねえ。

国外との関係も？！

荒神山古墳は国指定史跡。どうして荒神山に大古墳が作られたのだろうか？はたしてどんな王が眠っているのでしょうか？周辺は、わくわくする謎でいっぱいです。

いわゆる、「倭の五王の時代」

三国志の時代

平成28年度　稲部（いなべ）遺跡発掘調査現地説明会資料

〈添付〉 インターネット google 写真で見た近江稲部遺跡の位置

3.　邪馬台国の時代　鉄で栄えた近江の大都市集落「稲部遺跡」訪問記　2016. 10. 22.

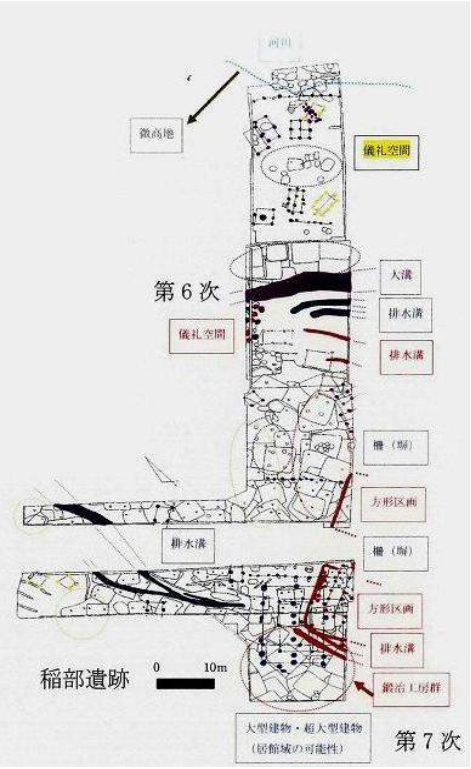
第６次・第７次 発掘調査現地説明会 参加記録

現地の写真を加えて　現地説明資料のまとめを整理転記し、まとめとした

稲部遺跡は標高約 90m 前後の旧愛知川の微高地上にあり、北には旧愛知川である文禄川やや南には同様に旧愛知川である来迎川流れ、周辺では弥生後期後期から古墳時代前期の遺構が密集して分布している。

伊部遺跡と伊部西遺跡を悪夢伊部遺跡群は１９８１年の宅地造成工事に伴う初めての調査。２０１３年から開始された市道改良工事に係わる調査で独立持柱建物・大型建物・方形区画・金属器工房などが発見され、、現在までに 180 棟を超える竪穴建物が検出されている。

６次調査区は(すでに埋め戻されている)独立棟持柱建物・井戸・金属器工房からなる儀礼空間の南側に位置し、今回の第６次の調査で大型建物３棟が出土。　７次調査区は６次調査区に続くさらに南側　密集する竪穴建物群と方形区画が確認された第３次調査区(現在埋め戻され、小高い土手になっている)の南側に位置し、今回の７次調査で大型建物２棟　超大型建物２棟　大規模な鍛冶工房群が確認された。



これらの調査で稲部遺跡群の全体的な遺構変遷が明らかになり、この稲部遺跡群は弥生時代から古墳時代巣にかけての日本の国家形成期を考える上で極めて重要な遺跡と評価されている。

3.1.　第６次調査域　稲部遺跡の中心部【1】祭祀の区画ほか

大型建物３棟を含む掘っ立て柱建物６棟以上　竪穴建物２０棟以上・排水溝４条・大溝１条などを検出。

倉庫・儀礼施設とみられる大型建物　３棟（２３．８０㎡以上・３０．７０㎡以上・推定５０．６０㎡の独立棟持柱建物）が、弥生時代終末から古墳時代前期（３世紀中葉から後葉）にかけて連続して同じ場所に立てられる集落の中心的な儀礼空間。儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とほぼ同じ時期。

大溝からは土師器とともに乾式系土器も出土。

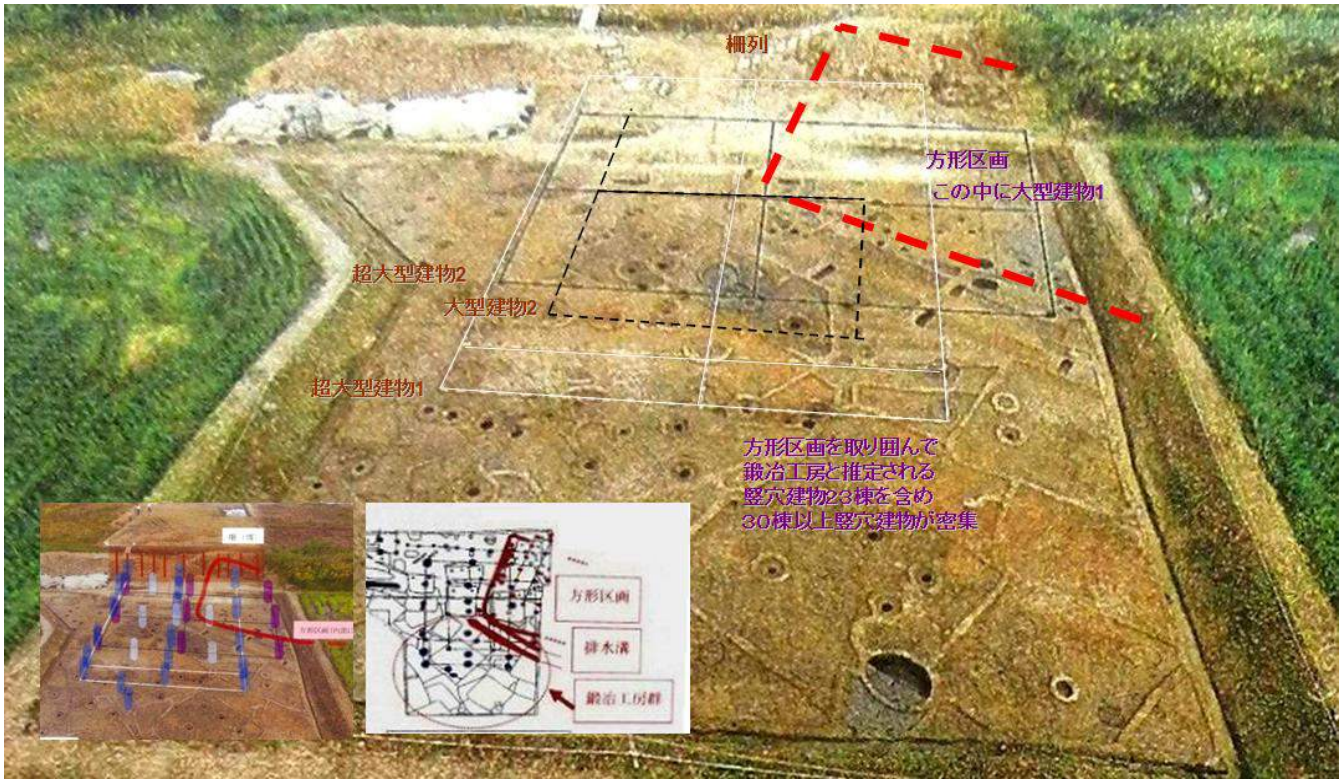
3.2.　第７次調査域　稲部遺跡の中心部【2】　方形区画と大型建物と鍛冶工房群

鍛冶工房の可能性が高い竪穴建物２３棟以上を含む竪穴建物３０棟以上・排水溝２条・方形区画の一部である溝、塀の可能性がある柵列を検出。弥生時代終末から古墳時代初頭(３世紀中葉)には、倉庫・儀礼施設や居館の可能性がある方形区画とその内側の大型建物１(独立棟持柱建物４３㎡)が出現し、方形区画の南側では大規模な鍛冶工房群で鉄器(鉄製吹や農工具)の生産が行われる。

その後、古墳時代前期前半から後半（３世紀中葉から４世紀）にかけて、方形区画を切ってさらに新しい大型建物２（６３㎡）・超大型建物１（１８８㎡）・超大型建物２（１４５㎡）が柵（塀の可能性もある）をともなって出現。

特に超大型建物１は纒向遺跡第１６６次調査の超大型建物（２３８．０８㎡）に次ぐ日本列島屈指の規模。

大型建物２・超大型建物１は居館域の一部を構成する建物であり、超大型建物２は王権の関与する巨大な倉庫である可能性が考えられる。



稲部遺跡　第７調査区

鍛冶工房が密集して存在した弥生時代終末から古墳時代初頭(３世紀中葉　)と
大型建物・超大型建物があった古墳時代前期前半から後半（３世紀中葉から４世紀）時代

二つの時代が重なるので、現説資料より整理して　空からの写真にプロットして見やすしてみました。　少し見やすしました。

弥生時代終末から古墳時代初頭（３世紀中葉）には、方形区画の内側に（独立棟持柱建物４３㎡）である大型建物１が出現し、方形区画を取り囲む南側ではでは大規模な鍛冶工房群密集して存在し、で鉄器（鉄製吹や農工具）の生産が行われていた。
都市集落の中核部に多数の鍛冶工房。当時大陸・朝鮮半島から手に入れた鉄素材をここで鉄器加工して、日本各地に供給したと推定される。　まさに国造りの権威の象徴が「鉄」と言われた時代を象徴する光景だと思える。
でも　全くこの鍛冶工房群からは鍛冶炉が出土しておらず、どんな鉄器加工・鉄器生産が行われていたか？ 今、それらを路ずることはできない。これからの重要な課題であろう。
そして、**古墳時代前期前半から後半（３世紀中葉から４世紀）にかけて、ヤマト王権が日本各地の国を取り込み国家形成を図る時代になるとこの稲部では、集落の中心部にあった鍛冶工房群に替わって超大型建物が建つ時代に。**
稲部遺跡はますます栄えてゆく。　**方形区画を切ってさらに新しい大型建物２（６３㎡）・超大型建物１（１８８㎡）・超大型建物２（１４５㎡）が柵（塀の可能性もある）をともなって　ずつと維持されながら出現してゆく。**
特に超大型建物１は纏向遺跡第１６６次調査の超大型建物（２３８．０８㎡）に次ぐ日本列島屈指の規模であり、稲部遺跡の首長はヤマト王権下でさらに勢力を伸ばし、当時日本の物流の結節点　近江にあって、当初の鉄器供給基地から「鉄」のみならず、物流拠点として　ヤマト王権とともに歩んだのであろう。この稲部の北にある荒神山山頂部には４世紀末の巨大な初期前方後円墳があり、この稲部の首長の墓ではないかと考えられている

独立棟持柱建物の復元（滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの』）

稲部遺跡の中心部に建つ超大型建物のイメージ図

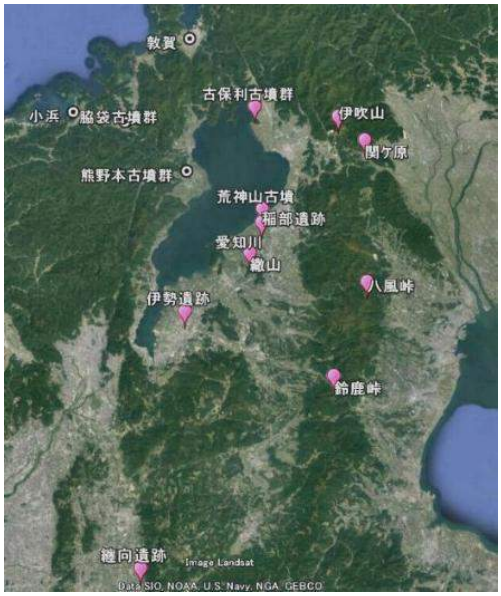
いままで、　この地の重要性　そしてここを拠点とする勢力が取り出されたことはないが、稲部遺跡の出現によって、大きくこの地がクローズアップされることとなった。

3.3. 発掘調査域から出土した遺物　　日本各地の土器片 ＆ 鍛冶関連遺物

1.　土器と土器片

大和・伯耆・越前・湖南地域・美濃・尾張・伊勢・東遠江から駿河の土器土器片が出土していることから、交流の要、物流の中心地であったことが、裏付けられる。朝鮮半島の渡来人との関係を示す乾式時も出土している。

これらの各地の土器片の出土と近江・伊部遺跡の地理的な位置づけを考えると、「北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある３世紀の近畿北部の中心的な集落」としての姿が　ここからも見えてくる。



出土した日本各地の土器・土器片や韓式土器

2.　鍛冶遺物

鍛冶関係の遺物については　現地説明会の資料には全く触れられていないが、現場には箱に詰めて整理された鉄滓や鉄片　鍛冶具などがんじされていました。　詳細はよく判りませんが、　新聞では　次のように報道されている。

鉄器工房は３０棟以上ある竪穴建物群で、各棟は一辺３．５～５．３メートルの方形。
うち２３棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかった。
一部に土なども含んだ状態だが、全体の重さは計約６キロに上る。
同時に鍛冶や鉄を加工する際に使った台石や、鉄製矢尻２個なども見つかった。

また、稲部西遺跡で青銅製の鏃や稲部遺跡の二次調査で棒状の青銅や青銅製品を鋳込む鋳型の外枠が見つかっており、青銅器の生産にもかかわっていたとみられるが、詳細は不明である。

7次調査区の鍛冶工房跡周辺から出土した鍛冶関連遺物
鉄片・鉄鏃・鉄滓・たたき石・台石など

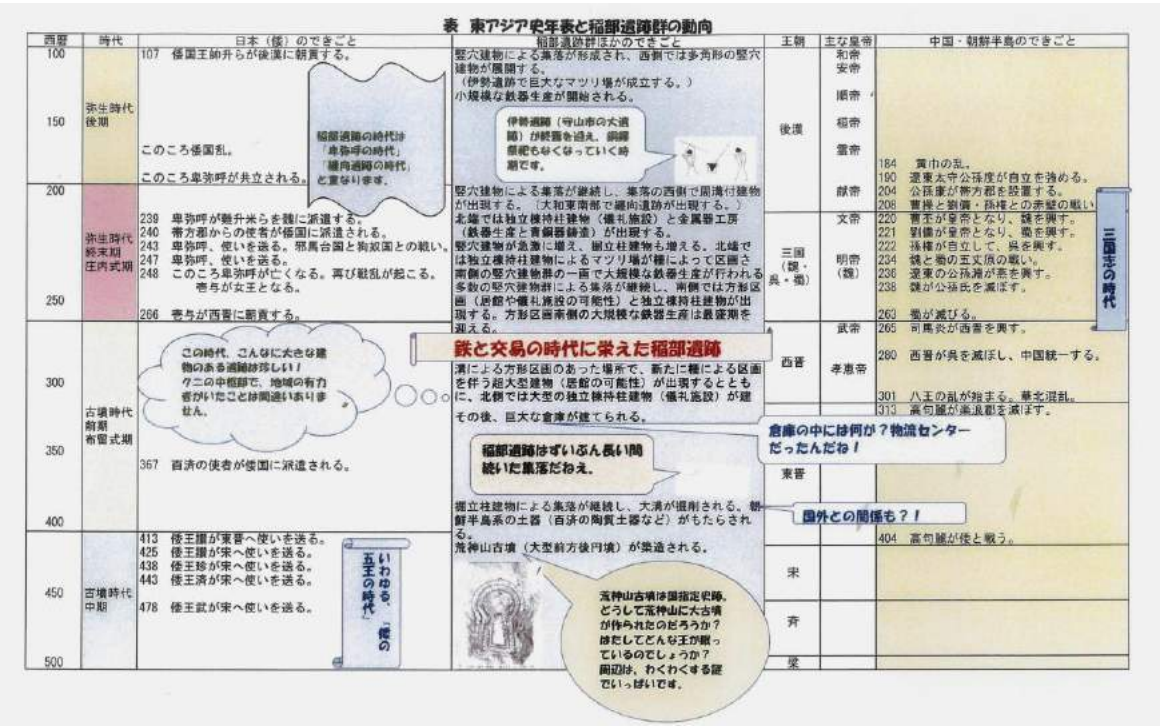
3.4.　今回の6次･7次　調査まとめ　<現説資料まとめの整理転記>

「北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある３世紀の近畿北部の中心的な集落」で、鉄器流通を中心に　祭祀都市・政治都市としての面を強く持ち、工業都市としての面も併せ持つ近江の巨大勢力・クニの中枢部であり、３世紀の国内の国内屈指の遺跡。

３世紀前半を中心とするヤマト政権が成立しつつある時代の重要な時期の大集落で、日本列島における倭国の成り立ちを考える上で　今までにないきわめて重要な遺跡である。

また、稲辺遺跡では　その後　ヤマト政権成立後も、大型建物・超大型建　物や独立棟持柱建物という首長層が居住したり、儀礼に使用したと考えられる建物と区画が時代を経るごとに出現し、王権との関りによって政治色を強めていく過程を示している。

1. 稲辺遺跡は直径数百ｍ　面積約２00000㎡の弥生時代中葉(２世紀)から古墳時代中期(５世紀)にかけて継続する巨大集落。　大和・伯耆・越前・湖南地域・美濃・尾張・伊勢・東遠江から駿河の土器土器片が出土していることから、交流の要、物流の中心地であったことが、裏付けられる。朝鮮半島の渡来人との関係を示す乾式時も出土している。これらの各地の土器片の出土と近江・伊部遺跡の地理的な位置づけを考えると、
「北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある３世紀の近畿北部の中心的な集落」としての姿が　ここからも見えてくる。
2. 青銅器の鋳造・朝鮮半島から運ばれた鉄素材をもとに鉄器の大規模な生産を行っており、???　まだ推論が多い
大型建物・超大型建　物や独立棟持柱建物という首長層が居住したり、儀礼に使用したと考えられる建物と区画が時代を経るごとに出現し、王権との関りによって政治色を強めていく過程を示している。
3. 祭祀都市・政治都市としての面を強く持ち、工業都市としての面も併せ持つ近江巨大勢力・クニの中枢部であり、３世紀の国内の国内屈指の遺跡。
３世紀前半を中心とするヤマト政権が成立しつつある時代の重要な時期の大集落で、日本列島における倭国の成り立ちを考える上で　今までにないきわめて重要な遺跡である。
また、３世紀にとどまらず、、４世紀～５世紀には　巨大倉庫の出現によって物流拠点として発展・継続し、韓式土器が出土するなどから、半島交流を通じ、先端技術を渡来人から導入していた可能性がある。
4. ヤマト政権を前提として　荒神山古墳の築造に関わる巨大勢力の本拠である可能性を含め、荒神山古墳との深いつながりを持つ遺跡である。
5. 「邪馬台国のほか　魏と外交関係のあるが30ヶ国ある」とて魏志倭人伝に書かれており、稲部遺跡もその一つの可能性がある。
まだ　稲部遺跡の発掘調査は全体の２割程度。まだまだ　明らかにせねばならぬ点も多く、今後の課題である。

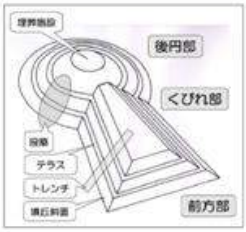


参考1　荒神山と荒神山古墳と稲部遺跡

稲部遺跡のすぐ北にあり、琵琶湖交通の目印でもある荒神山には４世紀末　ヤマトと同じ方式で築かれた前兆124mの大きな前方後円墳がある。琵琶湖交通・東国・北陸と畿内を結ぶ要衝　近江稲部の地にあって鉄の交易などの物流を握っていた近江の大勢力の首長の勢力圏にある荒神山。この地に強い勢力があったとは考えられていなかったが、物流拠点を握る大都市集落がベールを脱ぎ、そして　その地に前方後円墳の存在。この稲部の首長がヤマト王権と密接に結びついて重要拠点を握っていたと考えることをよく示しており、日本の国造りに新しい視点を提供する。

近江の前期古墳位置図

荒神山古墳は、彦根市の西方、琵琶湖岸に近い湖東平野の独立丘である荒神山（標高 284.1m）の山頂から、北へ約 150m下った尾根頂部に位置しています。彦根市教育委員会では、平成 15 年度～平成 19 年度にかけて４度にわたり、古墳の範囲確認を目的とする発掘調査を実施しました。調査の結果、荒神山古墳が全長 124mを測る前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）であること、築造時期は古墳時代前期末（４世紀末）であること、墳丘は葺石（ふきいし）で覆われ、前方部・後円部とも３段に築かれていること、各段のテラスには埴輪（はにわ）が巡っていたことなど、重要な発見が相次ぎ、平成 23 年２月に国の史跡指定を受けました。本市では「彦根城跡」「彦根藩主井伊家墓所」に次いで３件目の国史跡となり、彦根南西部地域では初めての指定となります。



◆ 古墳の規模 ◆

荒神山古墳は、主軸を北北西ー南南東に置き、前方部を北西に広がる琵琶湖に向けた前方後円墳です。古墳の各部位の計測値は次のとおりです。

全長：124m	前方部長：約 53m		後円部径：約 80m
	前方部長：約 61m	くびれ部幅：約 52m	
	前方部高：約 10m	くびれ部高：約 9m	後円部高：約 16m

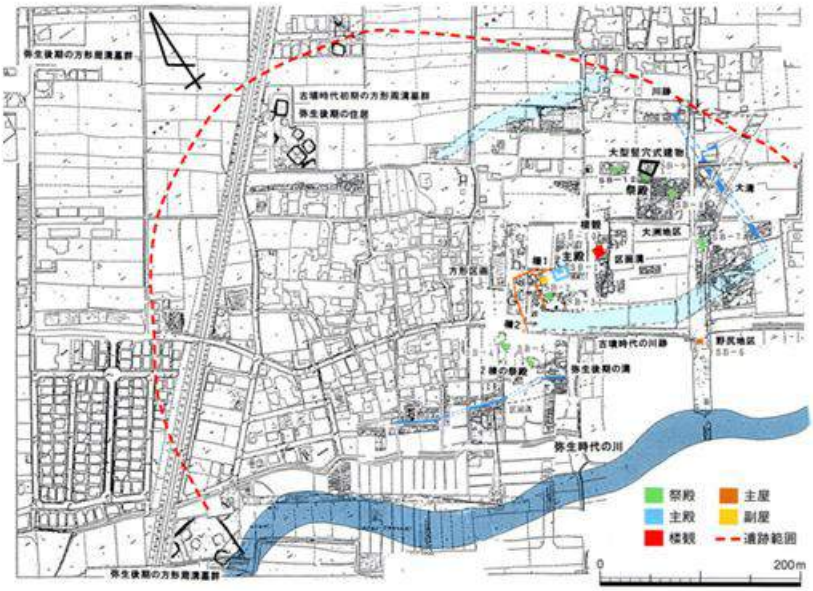
◆ 国史跡　荒神山古墳　彦根市教育委員会

https://www.city.hikone.shiga.jp/cmsfiles/contents/0000003/3477/21_kojinyama_kofun.pdf

参考2.　弥生時代後期の巨大祭祀空間を有する巨大都市集落　守山市伊勢遺跡

彦根の伊部遺跡に先立って、弥生時代の後期（１世紀～２世紀）近江に纏向に匹敵する大型建物や巨大祭祀空間を有する巨大集落遺跡「伊勢遺跡」が琵琶湖交通や畿内交通の要衝　守山市の琵琶湖岸近くに成立していた。

そして、この伊勢遺跡の衰退と入れ替わるがごとく、大型建物と巨大祭祀空間を有する彦根の稲部遺跡が繁栄してゆく。



この伊勢遺跡も野洲川が琵琶湖にそそぐ、琵琶湖交通並びに東国・北陸や畿内と伊勢・西国を結ぶ交通の結節点に存在した都市集落遺跡である。

私も2012年と2013年に邪馬台国の候補地の一つとして、話題になったときに訪れたことがある。

この伊勢遺跡の詳細は下記インターネットにありますので　ご参考に。

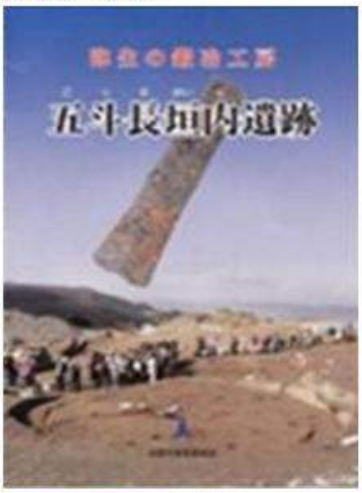
NPO法人　守山弥生遺跡研究会　発掘された弥生の王国

弥生時代後期の巨大政治祭祀空間を有する国史跡「伊勢遺跡」　http://ise-iseki.yayoiken.jp/index.htm

参考３　弥生終末期の鉄交易拠点の都市集落 稲部遺跡

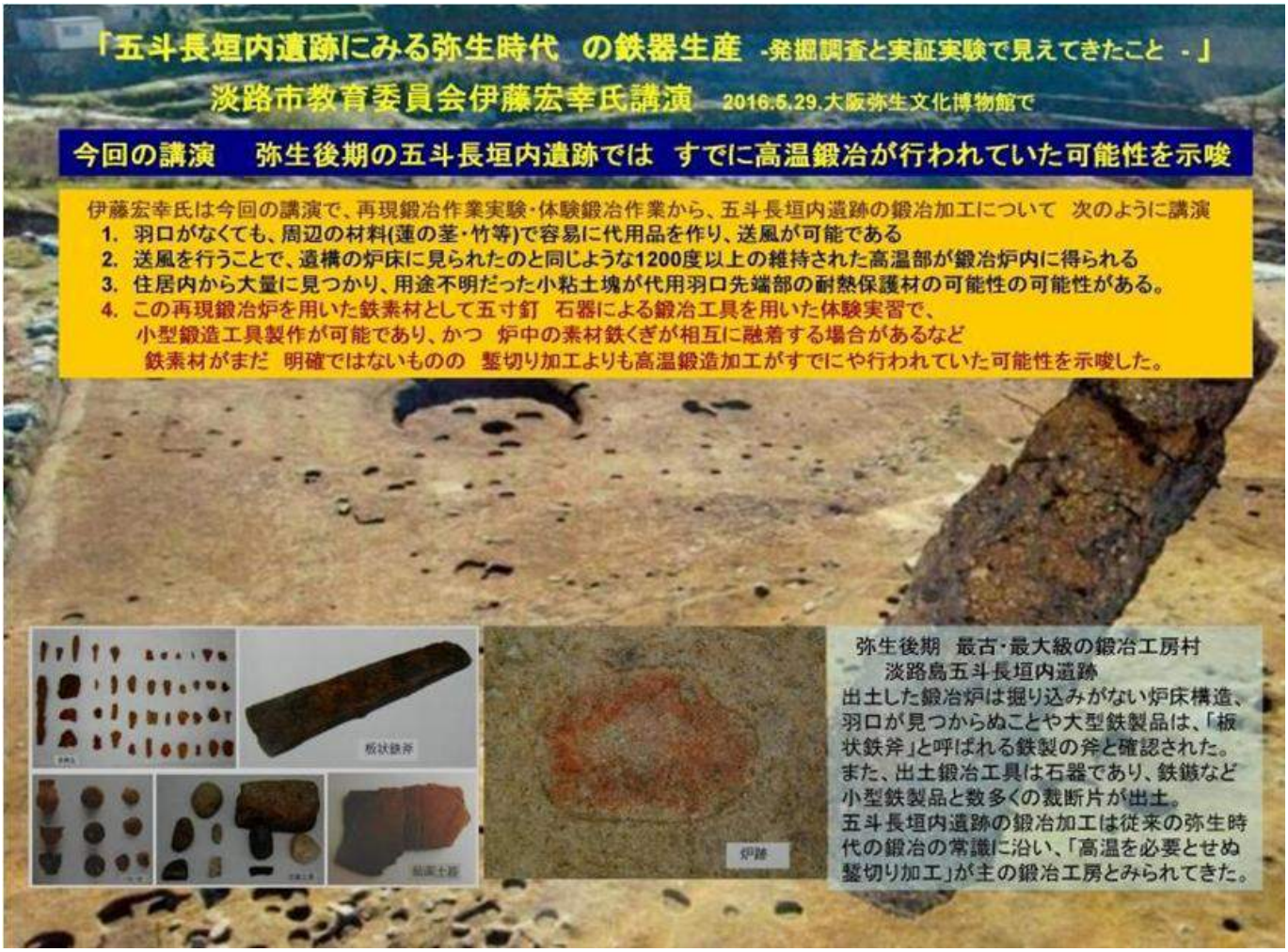
その都市集落内にある工場　鍛冶工房群ではどんな鉄器生産が行われていたのだろうか?

弥生時代後期の鍛冶工房村　淡路島五斗長垣内遺跡　　鍛冶工房イメージ図

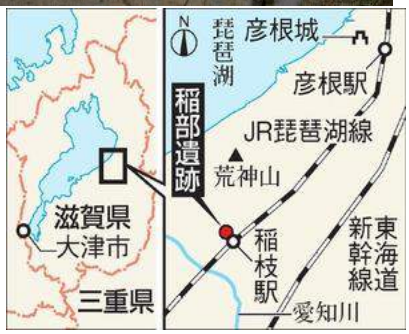


西に瀬戸内海を見下ろす標高２００メートルの尾根上に見つかった弥生時代後期日本最古最大級の鍛冶工房村
淡路島「五斗長垣内遺跡」現在は住民の手で竪穴建物が復元されている

淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産　淡路市教育委員会　伊藤宏幸氏講演 より　2016. 5.28.



4.　まとめ　　稲部遺跡 発掘調査　平成２８年現地説明会に参加して



卑弥呼の時代　ヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に

「大和の纏向遺跡に匹敵する大型建物を持つ 鉄の物流拠点とみられる 都市集落(彦根市稲部遺跡)」が出土の報に興味津々で出かけました。

大型建物のすぐそばには、繰り返し継続して建て替えられた多数の鍛冶工房とみられる竪穴住居群が密集する鉄器物流を担う近江の拠点集落で、初期ヤマト王権に組み込まれて、さらに発展してゆく。

大陸の「鉄」の覇権が卑弥呼・初期ヤマト連合をむすびつけ、日本の国づくりが進む。

日本の国造りにがかかわっていた鉄の現場に立つことができて、満足感いっぱい。

都市集落の中心　巨大建物が建つ方形区画を取り囲むように数多くの鍛冶工房関連の住居が建ち並んでいるなど想像もつかなかった。まさに鉄が主役の都市空間。

弥生後期　淡路島五斗長垣内遺跡
鍛冶工房内の鉄器加工イメージ図

卑弥呼の時代　掘っ立て柱建物を取り囲んで鍛冶工房が密集していた　稲部遺跡の中核部第７次調査区

ここで　どんな鉄のドラマが演ぜられたのだろうか??

残念ながら、鍛冶炉は出土せず、これらの鍛冶工房でどんな鉄づくりが行われていたかは全く不明のままであるが、卑弥呼の時代そして　初期ヤマト王権へとつながる日本の国造り。「鉄が主役」を実感することができてました。また、この稲部遺跡の役割　そして　日本の国造りかかわった鍛冶工房の鉄づくりの検討はまだこれから。

でも　また　一つ　卑弥呼の時代がベールを脱いだ。

夕闇迫るまで遺跡の中にいて、色々思いをはせつつ、　北に荒神山　南に安土繖山　そして今まで何度も出かけてきた近江・琵琶湖を思い浮かべながら、これからの展開に期待いっぱいで　JR 稲枝駅へ　帰ってきました。

車窓より夕暮れの近江平野を眺めながら

2016.10.22.夕　　by　Mutsu nakanishi

参考資料

****

1. 平成２８年度稲部遺跡発掘調査現地説明会資料　2016.10.22.　彦根市教育委員会
   http://www.city.hikone.shiga.jp/0000009271.html
2. 国史跡　荒神山古墳　彦根市教育委員会
   https://www.city.hikone.shiga.jp/cmsfiles/contents/0000003/3477/21_kojinyama_kofun.pdf
3. 弥生時代後期の巨大政治祭祀空間を有する国史跡「伊勢遺跡」 NPO法人守山弥生遺跡研究会
   http://ise-iseki.yayoiken.jp/index.htm
4. 稲部遺跡に関する　2016.10.18. 各社新聞報道

****

****

≪　参考　関連和鉄の道・Iron Road　*by Mutsu Nakanishi*　≫

****

1. 「卑弥呼の邪馬台国」の候補地を訪ねる【1】　2012.11.21.&　2013.2.11.
   東近江 野洲川南の湖岸近く弥生後期の大集落　守山市伊勢町**「伊勢遺跡」を訪ねる**
   魏志倭人伝の記述《卑弥呼の居処は「宮殿・祭殿」・楼閣・城柵」》すべてがそろう弥生後期の大集落
   http://www.infokkkna.com/ironroad/2013htm/iron9/1303iseiseki.pdf
2. 日本初の都市の出現　纒向遺跡を歩く 2012.7.24 & 8.23.
   http://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/iron8/1209makimuku00.htm
3. 古墳時代 朝鮮半島との交流玄関口「若狭」を再度訪ねる　2011.8.30.
   脇袋古墳群など若狭の王墓からの出土品見学 & 若狭小浜港・遠敷(おにゅう)の里 Walk
   http://www.infokkkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1110wakasa00.htm
4. 北近江安曇川安曇あずみ会でのプレゼンスライド　2011.12.1
   「和鉄の道Iron Road 」から見た日本誕生前夜-北近江・若狭が輝いた時代-
   http://www.infokkkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1112adogawa/1112adogawa.html
5. 大阪弥生文化博物館2016年春季特別展第3回考古学セミナー聴 講 まとめ<2>
   「淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産-発掘調査と実証実験で見えてきたこと?-」.
   弥生後期の五斗長垣内遺跡では　すでに高温鍛冶が行われていた可能性を示唆
   淡路市教育委員会　伊藤宏幸氏講演　2016. 5.28.
   http://www.infokkkna.com/ironroad/2016htm/iron12/1607awaji00.htm